

# 「アジア的価値」とアジアの 女性政治家の類型学

中 村 宏

## 目 次

はじめに

- (1) アジア的類型Ⅰ 父が著名な政治家であったケース
- (2) アジア的類型Ⅱ 夫が著名な政治家で夫の死後に政治家となったケース
  - (付1) アジアに見られる「西欧」的類型
  - (付2) 中南米に見られるアジア的類型

おわりに

## は じ め に

この小論は、研究ノート「世界各国の女性政治家——地域別比較」(『神戸学院法学』32巻4号2003年2月)の続編である。昨年、世界の約80カ国のトップレベルの女性政治家についての考察を企図したひとつのきっかけは、私が、神戸学院大学「アジア太平洋研究センター」の研究員として、2002年度と2003年度に「グローバル化時代における『アジア的価値』の実証的学際的研究」を課題とする研究プロジェクトに、多分にノミナルであるが、加わったことにある。このトップレベルの女性政治家についての調査の第一次的集計、各国ごとの女性政治家の人数、その役職名と就任期間、名前、これらについては、上記の「研究ノート」で公表している。この拙論では、アジアの女性政治家に共通して見られ

る特色を述べたい。要約的に言えば、アジアでは、なんらかの意味で、子供としてあるいは配偶者として、父あるいは夫を継ぐものとして、政治の場に登場してくる。これに対して、「西欧」（より正確に言えば西欧的政治文化をもつ国であろうが）では、むしろいわば自分自身として登場してくる。アジア的政治家では、なんらかの意味で、家族の誰かの政治家としての地位を継ぐ形で、政治の場に登場してくる。あるいは政治的家系の一員として登場してくる。「西欧」的政治家では、家族の誰かが政治家であるとしても、そのような場合はそもそも少ないのであるが、それは私的な領域で影響を与えるにとどまっている。確かに、このようなアジアと「西欧」の違いについてはすでに指摘されているところであり、とりたてて、この小論が新しい知見を提供していると主張するものではない。<sup>(1)</sup> 個々の政治家についても、既に多くの研究があり、この小論が特に何かを付け加えているわけではない。このような小論の中に、10人余もの政治家を盛り込もうとすること自体に無理もある。しかし、家族は、「アジア的価値」をめぐる議論の中心的位置を占めるものの一つであり、アジアの女性政治家と「西欧」（この小論では、北米、オセアニアを含めて「西欧」とする）の女性政治家の家族をめぐる違いについての考察は、「アジア的価値」の考察の一つの手掛かりにはなると思う。<sup>(2)</sup> また、当然の蛇足ではあるが、私の関心の中心は、政治に占める家族の役割の違いであり、それは、性を問わずいわゆる世襲的側面をなんらかの意味でもつ政治家を取り上げることによって、アプローチできるものであろうが、アジアと「西欧」で明瞭な違いを示す女性政治家のケースから接近しようとしたものである。<sup>(3)</sup>

前述の「研究ノート」に示したように、アジア諸国の方が「西欧」諸国よりも、女性政治家の登場は早くかつ多いのであるが、この小論での関心は、その事そのものではなく、家族が政治活動の単位となっているアジアと個人が単位となっている「西欧」との違いにある。

## 「アジア的価値」とアジアの女性政治家の類型学

- (1) Michael A. Genovese, *Women as National Leaders: What do we know ?*. In Michael A. Genovese (ed.), *Women as National Leaders*, 1993. この著作は、アキノ、ブトー、チャモロ、ガンディー、ゴルダ・メイヤ、イザベル・ペロン、サッチャー、この七人を取り上げた比較研究であるが、この小論を書くにあたって、最も示唆に富んだ文献であった。
- (2) Wolkowitz は以下のように述べている。ある国々では、家族が政治活動の単位となっており、そのような国々では家族が女性に政治家への道筋を与えている。他の国々では政治活動の単位は個人であり、個々人が特別の政治制度を通して政治家となっていく。そこでは女性はしばしば競争に破れる、と。Carol Wolkowitz, *Controlling Women's Access to Political Power: a Case Study in Andhra Pradesh in India*, p. 206. In H. Afsher (ed.), *Women, State and Ideology*, 1987.
- (3) 既に指摘されているように、アジアは多様性を持った地域であり安易に「アジア的価値」を論ずることはできない。(このことについては、例えば、山室信一、『思想課題としてのアジア』、岩波書店 2001年、32頁、「ヨーロッパとしての一体性を確認し、基礎づけるために対象化された地域としてのアジアという区域わけがなされており」。また増田義郎、『文明史におけるアジア』、『アジア人の価値観』、亜細亜大学アジア研究所、1999年、参照。)この小論で取り上げた「女性政治家の在り方」を巡る事例は、アジアと「西欧」の相違がかなり明瞭に見られる事例である。

### (1) アジア的類型Ⅰ 父が著名な政治家であったケース

#### 類型Ⅰ-1 父の悲劇的な死(暗殺)で跡を継いで政治家となったケース

- 1 パキスタンの首相・ブトー Benazir Bhutto (在任1988-90, 1993-96)
- 2 バングラデシュの首相・ハシナ Sheikh Hasina Wajed (在任1996-2001)

アジア的類型の考察を始めるにあたって、まず、「西欧」について概観しておこう。「西欧」では、以下のような女性が大統領あるいは首相となっている。アイルランドの大統領・ロビンソン(在任1990-97)、マカリーズ(在任1997-)、イギリスの首相・サッチャー(1979-90)、スイス

の大統領ドライフス Ruth Dreifuss (1999-99), ノルウェーの首相・ブルントラント (1981-81) (86-89) (90-96), フィンランドの大統領・ハローネン (2000-)<sup>(1)</sup>, フランスの首相・クレソン (1991-92), ポーランドの首相・スホッカ Hanna Suchocka (1992-1993), ポルトガルの首相・ピントシルゴ Ruivo Pintasilgo (1979-1979) およびカナダの首相・キャンベル Kim Cambel (1993-93), ニュージーランドの首相・シプリー Jennifer Shipley (1997-99) とクラーク Hellen Clark (1999-) である。以上の中で、父親が大統領や首相であった政治家はいない。ただし、ブルントラントの父は大臣を経験している。しかし、この点で、「西欧」の女性政治家の中でブルントラントは例外に属する。上記の人たちは、アジアの場合のような「建国の父」の子供ではなく、むしろ、普通の家庭で育った人たちである。ただし、学歴などから判断して、平均よりは明らかに社会階層的に高い家庭であるが。

しかし、例えば、サッチャーの場合、サッチャーが首相就任時に、尊敬する人とは聞かれて、父と答えたことは知られているところである。いわゆるサッチャリズムに父の影響は明らかに見られる。しかし、サッチャーの父は、小さな町の市長であったのであり、サッチャーの政治的成功において、父は何ら直接的な役割を果たしていない。父の影響は、直接には、私的な領域にとどまっている。ただし、アジアの場合と比較するには、多くの述べなければいけないことがある。この小論では、アジアの場合について述べるに止め、「西欧」のケースについては、なお必要なデータを得られれば稿を改めて述べたい。

(1) フィンランドで、2003年4月に、ヤーテーンマキが首相となり、大統領と首相の二つのポストを女性が占めることになった (朝日新聞, 2003/4/16)。

1 パキスタンのブナジル・ブトー (1953-) は、35歳の若さで、イスラム教国で最初の女性の首相となった。ブトー (以下、この小論では、ブトーは全てブナジル・ブトーを指す) は、パキスタン人民党の党首と

して、大統領および首相となったが、クーデターで失脚し処刑された、Z. A. ブトー (1927-79) の子供 (長女) である。ブトーの祖父 (1889-1957) もボンベイ州首相を務めている。ブトー家は貴族的大地主である。(ブトーは結婚に際して自分の旧姓を保持した<sup>(1)</sup>)。パキスタン人民党はブトー家の門閥政党的色彩が強いといわれる<sup>(2)</sup>。

ブトーの他に妹と弟が二人いたが、ブトーは長子として弟に勝る地位にあったようであり、父の最愛の子であったといわれる。ブトーもまた父を尊敬していたという。ブトーは、オックスフォード大学に留学するが、1977年に帰国する。その直後、クーデターにより首相である父が幽閉され、これを機に彼女は政治活動を始める。二人の弟は当時国外におり軍事政権により入国を禁止された。ブトーは、処刑の直前に、30分のみ父に面会することを許され、父の遺志を継いで祖国のために政治家として尽くすことを誓ったという。ブトーは、ロンドンに亡命し、そこでパキスタン人民党の党首になる。ブトーの母、つまり、Z. A. ブトーの妻が副党首になっている。父あるいは夫の地位を娘あるいは妻が継承することは、自然なこととして受け入れられていることを窺わせる。そこに結集した党幹部たちは、ブトーを非業の死を遂げた党首の娘として、名目的に党首としそこに止めようとしたが、ブトーは、次第に、実権を確立していく<sup>(5)</sup>。

軍事政権は、民政への移行を決定し、1986年、ブトーはパキスタンに戻る。そこで、ブトーは、熱狂的民衆に迎えられたが、「自分への支持の大部分が、殉教した父への追憶からきたものだという事に気付いていた<sup>(6)</sup>」という。ブトーもまた、殉教した父の娘として活動した。

男性優位的なパキスタンの文化の中で、女性の役割は家庭に限定されがちであったが、女性が、投獄されたり死んだ男性の家族の政治的役割を引き継ぐことは、一般的に容認されていたようである<sup>(7)</sup>。

1988年の総選挙で、ブトーの率いる人民党が勝利し、ブトーは、首相となる。ブトーは、35歳であった。ブトーの母、つまり、Z. A. ブトー

の妻は副首相に就任している。

ブトーは、帰国後、パキスタンの伝統にしたがって、見合い結婚をしている。独身であることは政治的に不利であったからである。ブトーは、政治的野心を持たない男を選んだ。ただし、夫とその一族の汚職容疑が、ブトーの失脚の原因の一つとなった。<sup>(8)</sup>

(1) 母は、イラン系のシーア派イスラム教徒であった。Nancy Fix Anderson, Benazir Bhutto and Dynastic Politics, p. 44. In Michael A. Genovese (ed.), *Women as National Leaders*, 1993.

(2) 参照、佐藤宏／岩崎育夫編『アジア政治読本』1988年、13章（近藤則夫）「パキスタン」。この小論の作成に当たって、多くのアジアの政治に関する日本語文献を参照したが、この小論で取り上げている政治家についての論考以外は、記載しない。

(3) 以下は、バングラデシュの農村の状況についての記述であるが、パキスタンの状況を窺わせるものであろう。

「子供が産まれたとき、人々は、男の子か女の子かと聞く。産婆が、女の子だと答えれば、突然、人々の顔は青ざめ、祝福の祈りはない。祝福の祈りは男の子の時だけである。……女の子でも学校に行くかもしれないが、十一歳かそこらになれば止め、家にいて母親の手助けをし主婦になるように仕込まれる。男の子は、将来の父親であり家長であるから食物から教育まで特別な扱いを受ける。十二歳にもなると、女の子は結婚し他家に行く。彼女は、もう大人の女であり、籠の鳥のように、夫の家に閉じこめられる。」

Marion Fennelly Levy, Hasina Khan: Women and Community Development in Bangladesh, pp. 46-47. In Marion Fennelly Levy, *Each in her own Way: Five Women Leaders of the Developing World*, 1988.

娘が父の最愛の子であったということは、特別のことであったと思われるのである。また、この小論で取り上げているアジアの女性政治家たちの教育水準の高さは、イスラエルのゴルダ・メイアをやや例外として、一般の女性と、また一般の人々と、際立った対象をなしている。

(4) 二人の弟達と妹は、政治的野心も能力もなかったという。Nancy Fix Anderson, op.cit., p. 49. 下の弟は、1985年に、南フランスで謎の死を遂げている。Cf. Bhutto, *Daughter of Destiny: An Autobiography*, 1989, Chapter 12.

(5) Cf. Steven R. Wiseman, The Return of Benazir Bhutto, Struggle in Pakistan, *The New York Times Magazine*, September 21 1986, p. 48.

- (6) Nancy Fix Anderson, op. cit., p. 52. 33歳のブトーがラホールに帰国したときの民衆の熱狂的歓迎の様子については、Cf. Steven R. Wiseman, op. cit.. ワイズマンも、「ブトーは、父の被保護者 Protegee でなければ、何程の者でもなかったろう」と述べている。Ibid., p.43. ワイズマンはまた、「(カラチの) 通りの至る所にブトーとそれ以上に彼女の父の写真が飾られていた。……今日、ブトーは幾度も幾度も亡き父親を呼び醒ました。ブトーは民衆に向かって宣言した。『あなたがた、国民を見るとき、私は、(亡き父) ブトーが我が眼前にいるかのように感じる。』こう、その日の有様を叙述している。Steven R. Wiseman, A Daughter Returns to Pakistan to cry for Victory, *The New York Times*, April 11, 1986.

ラホールに帰国した日についてのブトー自身の記述は Cf. Bhutto, op. cit., pp. 328-329. 彼女自身の記述には、彼女への民衆の支持は父への支持であったといった記述は見られない。民衆の歓呼は、「Bhutto, My sister, Your sister」と記されている。彼女自身の記述からすると、彼女自身への支持でない部分があるとすれば、それは、クーデターの首謀者 Zia (ジアウルハク) への怒りであった。

- (7) Linder K. Richter, Exploring Theories of Female Leadership in South and Southeast Asia, *Pacific Affairs*, 63 1990-91, p. 526. この論文には、アメリカ (USA) のケースについての若干のしかし興味深い言及があるが、アメリカとアジアとの比較については稿を改める機会を得られれば幸いである。
- (8) ブトーに関して、まだ多くの文献があるが、逐一は記載しない。他の女性政治家についても同様に以下の注で言及した以外に多くの文献があるが、逐一は記載しない (そのかなりについては、まだ参照できていない)。  
また。それぞれの女性政治家の父あるいは夫である政治家についての多くの文献がそれぞれあるが記載しない。

2 バングラデシュの首相・シーク・ハシナ・ワセド (1947-) は、アワミ連盟の指導者として独立を実現した英雄であり、初代の大統領、首相となったが (1975年以後、一党独裁体制を築く)、暗殺された (軍部によって殺害された) 大統領シーク・ムジブル・ラーマン (Sheikh Mujibur Rahman 1920-1975) の子供 (長子) である。ハシナの父は、「建国の父」と呼ばれる。元来、シーク家は、数世紀にわたって、バングラデシュ地方の有力な一族である。

両親の間には、二人の娘と三人の息子がおり、ハシナは長女であった。<sup>(1)</sup>ハシナは、1967年に Wazed Mia (1941- ) と19歳で結婚している。当時、父は獄中であつた。Wazed Mia は、学生運動のリーダーであり、アワミ連盟に加わっている。アワミ連盟の活動を通して、シーク家の人々は、Wazed Mia と知合う。結婚後も、二人は、アワミ連盟での活動を続ける。Wazed Mia は、シーク・ムジプル・ラーマンの義理の息子として、アワミ連盟で重要な位置を占めたと思われる。

バングラデシュは、パキスタンから独立し、父がその指導者となつたのであるが、1975年8月、ハシナ夫妻とハシナの妹のヨーロッパ滞在中にジア Ziaur Rahman 将軍によるクーデターが起き、両親と弟達は全て殺害される。ハシナ夫妻とハシナの妹は、インドに難を逃れる。当時のインドの首相はインディラ・ガンジーである。<sup>(2)</sup>妹は、10歳年下で当時まだ18歳であつたのであり、「建国の父」の跡を継ぐ者はハシナ以外になつた。<sup>(3)</sup>

4、5年後に、アワミ連盟の幹部が、インド在住のハシナに、アワミ連盟の党首になることを求める。夫 Wazed Mia は、ハシナが政治から離れることを望んだといわれるが、ハシナは、1981年、党首に選出され就任する。同年の五月、六年の亡命生活ののちハシナは、祖国に帰り、百万余の民衆の歓迎を受ける。ハシナは父の墓地を訪れ、「父の墓地から民主主義を復活するための戦いをはじめ」<sup>(4)</sup>。五月末、クーデターがおき、ジアは殺される。十一月、大統領選挙が行なわれるが、アワミ連盟は Kamal Hossain を候補者として擁立したが、エルシャド Ershad 将軍が実質的に率いる B N P の候補者が勝利する。1982年、エルシャドはクーデターで権力を掌握する。軍事政権下で、ハシナはアワミ連盟の党首として、弾圧の下で戦うことになる。

ハシナの首相就任は、「父の死から21年を経てであつたが、娘の勝利を保障するに十分なほど、父の人気は高く」、彼女は至る所で、いわば、「シーク・ラーマン、万歳！」<sup>(5)</sup>の歓呼で迎えられたという。

## 「アジア的価値」とアジアの女性政治家の類型学

- (1) この小論でのハシナについての記述は、以下に多くを負っている。Sirajuddin Ahmed, *SHEIKH HASINA: Prime Minister of Bangladesh*, 1998. 著者は以下のように述べている。「彼女は父に政治家になるための教育を受けた。父は、彼女と政治について議論した……彼女は、父の政治哲学に深く影響を受けた。」*Ibid.*, p. 11.
- (2) Cf. *Ibid.*, CHAPTER 6.
- (3) ただし、日本の感覚で言えば、娘婿である Wazed Mia が後継者になり得るように思われるのであるが、Wazed Mia を後継者として望む動きがあったという記述を見ていない。
- (4) *Ibid.*, p. 93.
- (5) *Ibid.*, p. 1. なお、バングラデシュは、1991年の民主化後、大統領職は存続しているが、首相が最も重要な役職である。

### アジア的類型 I - 2 父の死後に跡を継いだケース

#### 1 インドの首相・ガンジー Indira Gandhi (1966-77)(1980-84)

1 インディラ・ガンジー (1917-1984, 以下、インディラと記す) はジャワハラル・ネルー首相 (在任1946-64) の一人娘である (インディラの祖父も弁護士で国民会議派のリーダーであった)。インディラは、父とともに、マハトマ・ガンジーの指導下で、反英不服従運動に参加している。母は、病身であり、1936年に療養のために行っていたスイスでなくなっている。インディラはネルー家の家事に責任をもつ立場に早くからなったわけである。

その後、インディラは、オックスフォード大学に入学、さらに6年をヨーロッパで過ごす。この時期に、ロンドン大学 (L S E) の学生であったガンジー (Feroze Gandhi) と知り合い、1942年に結婚している。夫ガンジーは普通の家庭の出でゾロアスター教徒であり、父ネルーの信奉者であった。ネルー家はヒンズー教徒で高位カーストに属している。結婚後、夫ガンジーは、1950年から国会議員となるが、むしろネルー家に入ることで政治家としての地位を得たと見てよいであろう。夫ガンジーは1960年に死去している。<sup>(1)</sup>二人の結婚に際して、父ネルーは、ガンジ

ーがプロアスター教徒であることよりも、庶民の出であることを懸念したという。<sup>(2)</sup>

インディラは、第二次大戦中、反英運動に参加、一年近く投獄される。<sup>(3)</sup> 父ネルーの首相就任後は、父の政治活動を助けて国内外で活動、<sup>(4)</sup> やがて国民会議派総裁に就任（1959-60）する。父の死後、<sup>(5)</sup> シヤストリ Shastri が跡を継ぐがシヤストリの急死で、1966年に第三代首相となる。国民は、首相就任を祝して、「インディラ万歳」とともに「ジャワハラル万歳」<sup>(6)(7)</sup> を叫んだという。

インディラの首相在任中（1980）に、インディラの後継者と見られていた次男サンジャイが飛行機事故で死去する。インディラは、インド航空のパイロットであった長男のラジブに次男サンジャイの選挙区を継がせ政界入りさせる。<sup>(8)</sup>

これは、サンジャイ未亡人マネカ Maneka の怒りを買ったという。マネカは自分がサンジャイの正統な後継者であると考えていたからである。<sup>(9)</sup> インドの歴史には夫である王の死後、女王として統治にあたった未亡人が何人か、見られるという。インディラはマネカをネルー家から追い出す。ただし、マネカは、後に、サンジャイの未亡人として政界入りを果たしている。

インディラは、1984年、首相在任中に暗殺される。国民会議派は、次男ラジブを直ちに後継者に選出し、ラジブが首相に就任する。ラジブの暗殺まで、ネルー家三代で合計40年首相を務めている。<sup>(10)</sup>

「インド政界で、重要な役職にある女性のほとんどは、著名な男性の政治家の親族であり、彼女たちは、家族王朝を引き継ぐのに適当な年齢のあるいは気性の男子のいない政治家家系の一員である。」<sup>(11)</sup> インディラは、いわば、インド国民の母であり、インドの統治は、ネルー家の家事であったといえよう。そこでは、私的なものも公的なものであり、公的なものも私的なものであった。<sup>(12)</sup>

（1） インドでは、見合い結婚が一般的であり、Bumiller は、「現在（1980

「アジア的価値」とアジアの女性政治家の類型学

年代—引用者)でも95%の結婚が見合いであるという推定があるが、インドの統計というものはあまり正確ではないし、社会学者や一般の人たちはむしろ95%以上だろうと思っている……恋愛結婚は、都市部のほんの一握りのエリート層の中にのみ見られる」と述べている。Elisabeth Bumiller, *May you be the Mother of a hundred Sons*, 1990, pp. 25-26. この著作は、著者のインドでの4年間の生活と数百人の女性へのインタビューに基づく、インドの女性の生活についての記述である。

- (2) Cf. Jana Evertt, *Indira Gandhi and the Exercise of Power*, p. 108. In Michael A. Genovese, *op. cit.*
- (3) Cf. Kirishan Bhatia, *Indira: A Biography of Prime Minister Gandhi*, 1971, chap. 5 Prison.
- (4) インディラにとって、父の政治活動を助けるのか、妻として家庭に入るのかは、かなり困難な選択であったようである。インディラは、決定的に政治の世界に足を踏み入れたのは、父の代わりにある女性候補者の選挙応援にいったときであった、と回想している。Cf. Kirishan Bhatia, *op. cit.*, pp. 108-109.
- (5) 父ネルーがインディラを後継者(後継首相)として意識したかどうかについては、両説あるようである。Jana Evertt は、後継者にする意志はなかったろうとしているが、Lichiter は、むしろネルーによるいわば道ならしがあったとしている。Cf. L. K. Lichiter, *Exploring Theories of Female Leadership in South and Southeast Asia*, *Pacific Affairs*, 63 1990-91, pp. 533-34. また、Cf. F. R. Frankel, *India's Political Economy 1947-1977*, 1978, pp. 242-43. 「シャストリはネルーに忠誠心と感謝の念を確かに持っていたし……シャストリは、(急死しなくとも)インディラのために短期間で辞任したろうと想像することさえできる。」*Ibid.*, p. 242. フランケルはネルーが、Morarji Desai を斥けこの控えめなシャストリを後継者としたことに、ネルーの意志を見ようとしている。

インディラが国民会議派総裁に選出されるに当たった父ネルーの関与については、Cf. Zareer Nasani, *Indira Gandhi: A Biography*, pp.104-106.

- (6) Dom. Moraes, *Indira Gandhi*, 1980, p. 127. Moraes は、群衆は、瘦身のインディラに、イギリス軍を恐れなかった若き日のネルーを見ていたのかもしれない、と述べている。Cf. *Ibid.*, pp. 127-8.
- (7) インディラを支持した党幹部(シンジケート)の一人 Kamaraj は、「シンジケートにとって、婦人、とりわけネルーの娘は、理想的な道具になるだろう。彼女の血統は、大衆の想像力を掻き立てるであろうし……シンジケートは、女王造りから人形師に、仕事を変えれば良いだろう、と考えた。」D. Moraes, *op. cit.*, p. 123.

(8) 弟, サンジャイの死後, 政界入りに際して, ラジブは, 「私は, 政治のことは余り知らない。私に分かるのは, 誰かが母を助けなければいけないということだ」と語ったという。D. Bobb, *Ordeal of Prince Charming, India Today*, 15 July 1991, p. 62.

なお, ラジブについては他のカタカナ表記もある。この小論で取り上げている多くの政治家についても同様にこの小論とは異なるカタカナ表記がある。それぞれについて記載はしないが, 誰について述べているのか特定はできているものと思う。

(9) この間の事情は Cf. Jana Evertt, *op. cit.*, pp. 123-124. pp. 127-128.

(10) ラジブの死後, 妻であったソニア Sonia が国民会議派の党首になっている。

(11) Jana Evertt, *op. cit.*, p. 127.

(12) Cf. *Ibid.*, p. 131.

### アジア的類型 I - 3 死後から数十年を経て政治家となったケース

1 フィリピンの大統領・アロヨ Gloria Macapagal-Arroyo (2001-)

2 インドネシアの大統領・メガワティ Megawati Soekarnoputri (2001-)

1 フィリピンのアロヨ (1947-) は, マカバガル大統領 (在任1961-65) の娘である。<sup>(1)</sup> アメリカ留学後, 大学教員となり, 弁護士で実業家のアロヨと結婚している。政治に直接関与したのは, アキノ政権下 (1986-92) であったと思われる。<sup>(2)</sup> 夫アロヨの祖父は, 上院議員を務めている。

アロヨは, 1992年に上院議員となり, 1988年に彼女は, 副大統領に当選する。フィリピンの副大統領は, アメリカと違って, 大統領とは別個の投票で選出されるが, アロヨは, エストラダを上回る得票で当選している。2001年1月にエストラダ大統領の辞任に伴って, 副大統領から大統領に昇格する。

父, マカバガル (Diosdado Macapagal) は, 1910年生まれ, 外交官, 国会議員を経て, 1957年に副大統領となり, 1961-65年の間, 大統領を

務め、1965年の大統領選挙でマルコスに敗れている。

前述のインディラの場合は、父の死後すぐにシャストリ内閣の閣僚となり、シャストリの急死で首相となっている。しかし、アロヨの場合は、父の大統領在任時から30年を経て、副大統領に当選している。

- (1) マカバガルと先妻(1942年に死去)の間に二人の子供があり、マカバガルは、再婚して、二人の子供、アロヨとディオスダド・ジュニアをもつ。他の三人の子供については情報を得ていない。マカバガルは、むしろ貧しい家の出身であり、後述するアキノ家とは全く異なる。
- (2) アキノ政権で、Under Secretary of the Department of Trade and Industry 等に就任している。

2 インドネシアのメガワティ・スカルノプトリ(1947-)は、「建国の父」、スカルノ大統領(1901-70, 大統領在任 1945-67)の第一夫人との間の第二子である。スカルノは政治家に育てるつもりがあったという。第一子は男の子で、第三子も男児であった。国立パジャジャラン大学に入り、インドネシアの学生運動に参加するが、1965年、9.30事件で父スカルノは実権を失い、メガワティも政治を離れる。<sup>(1)</sup>20年程の後、1987年、メガワティは、当時の野党、民主党に迎えられ夫とともに入党し、中部ジャカルタ副支部長に就任した。同年の総選挙で夫、弟とともに国会議員となる。<sup>(2)</sup>1993年末には党首に選出される。1996年、スハルト政権の圧力で、メガワティは、党首を解任されるが、1998年、スハルト失脚後に党首に復帰、1999年の総選挙で闘争民主党を率いて勝利し、同党は第一党になる。メガワティは、同年に、国民協議会で副大統領に選出され、<sup>(3)</sup>2001年、国民協議会は、ワヒド大統領を罷免し、メガワティを大統領に選出する。<sup>(4)</sup>

アジアの女性政治家の多くが「家族の紐帯」によって登場してくるのであるが、ブトーやインディラのケースとメガワティのケースは違うように思われるのである。リヒターは、1990年に、南アジアと東南アジア

では、女性政治家は、家父長制的イデオロギー、家族の紐帯、殉教、こうしたものから生まれており、「著名な男性の政治家と家族的繋がりを持つ女性に政治的に重要な役職への道が開かれている」と述べている<sup>(5)</sup>。この指摘は、1990年代以後に登場する、メガワティやアウン・サン・スー・チー（補注を見て頂きたい）にも当てはまっているのであるが、その意味するところは違っていると思われる。ブトーやインディラの場合は、大きな影響力をもつ、ブトー家、ネルー家の一員として、父の死の直後から登場してくるのに対して、父の死後、数十年を経て登場してくる、メガワティやスー・チーには、スカルノ家、アウン・サン家というほどのものはなく、「建国の父」は、人々の追憶の中にしかなかったであろうからである。

- (1) この間にメガワティは、最初の夫を飛行機事故で亡くすが実業家と再婚し主婦としての家庭生活に入る。
- (2) 「スカルノは非常にカリスマ性の強い指導者であったから、国民の間には、心情的に彼を懐かしむ者は常にいた。当初はそれをとても口にさせるような雰囲気ではなかったが、1980年代中頃になると、勇敢に表明する人々もでてくるようになった。メガワティ登場の背景にはこういった政治状況の変化があり」。倉沢愛子「メガワティ・スカルノプトリ」（山崎朋子『アジアの女性指導者たち』筑摩書房 1997 所収）160頁。倉沢は、スカルノの長男は政治に興味をもっていなかった、と述べている。
- (3) 副大統領に選出された頃の状況については、秋尾沙戸子『運命の長女 スカルノの娘メガワティの半生』（新潮社 2000年）がある。「長く政治を避けて生きてきた長男グントゥールは、妹メガワティの応援のために六月の選挙キャンペーンに参加した」。同上 323頁。メガワティに多少ぶらさがるようにしてスカルノ一族が政治の舞台に登場してくる様子が描かれている。
- (4) 『アジア動向年報2002』、アジア経済研究所 386-388頁。The Statesman's Year Book 2002, pp. 888-889. 他の政治家についても、こうした年鑑類を参照した。
- (5) Linda K. Lichter, *Exploring Theories of Female Leadership in South and Southeast Asia, Pacific Affairs*, no. 63, 1990-91, pp. 525-526. p. 528.

## 「アジア的価値」とアジアの女性政治家の類型学

(補注) アウン・サン・スー・チーのケース

ミャンマー（ビルマ）の、民主的選挙の結果が尊重されていれば、首相になりえたアウン・サン・スー・チー（1945-）もまた「建国の父」であり暗殺されなければ首相になったであろう著名な政治家アウン・サン（1915-1947）の娘である。父アウン・サンが死去したのは、スー・チーが2歳のときである。母親は、国会議員となりまたミャンマーで最初の女性大使となっている。スー・チーは、オックスフォード大学に入学、やがて、英国人学者マイケル・アリスと結婚し、国外で24年間を過ごす。1988年、母の看病のために帰国する。この時期に軍事政権反対の民主化運動が発展し、スー・チーは、国民民主連盟を結成することになる。父の命日の式典に遺族代表で参列したのが、1988年に国民の前に姿を現した最初であったという。南田みどり「アウンサンスーチー」（山崎朋子，前掲書，所収）209頁，参照。国民民主連盟は、1989年の総選挙で圧勝するが、軍事政権が民政への移管を拒み、スー・チーが長く自宅軟禁状態に置かれていることはよく知られているところである。アウン・サンには、二人の息子（スー・チーの兄）がいたが、次男は子供の時に死んでいる。長男について1988年当時存命であったか何をしていたか確かめられていない。

アジア的類型 I - 4 いわば「父の娘」として政治家となったケース

### 1 トルコの首相・チルレル Tansu Ciller (1993-96)

1 チルレルは、1946年生まれ。チルレルの父は若い頃はジャーナリストで選挙に出たことがあるが落選し政治を去り官吏となったという。チルレルは、ボスポラス大学卒業後、アメリカに留学している。チルレルは、結婚するが、結婚時に夫を説得し Ciller 姓を選んだといわれる。夫が Ozer Ucuran Ciller を名乗ることになる。夫は、銀行経営者であったが、夫の銀行はその後破産している。しかし、チルレルの首相就任後に、彼は事業に成功する。チルレルは、「父の娘」あるいは「夫の妻」としての政治家ではない。しかし、にもかかわらず、チルレルは、ある意味で「父の娘」としての政治家である。

チルレルは、1974年に母校ボスポラス大学の経済学の教授となる。

1989年、当時の正道党党首デミレル Suleyman Demirel の熱心な勧誘で同党に入党した。トルコの国会議員選挙は拘束名簿式の比例代表制であるが、1991年、デミレルは、総選挙にあたって、チルレルを同党の名簿一位に据え、チルレルは当然のこととして国会議員となった<sup>(1)</sup>。チルレルは、副党首となりデミレル内閣に入閣する。まもなく、デミレル首相が、オザル大統領の死去により、大統領に選出されたのに伴い、首相になる。

デミレルは、イスラム教的色彩の強い中道右派政党の有力政治家であり、軍部としばしば対立し、軍部によって二度首相を辞任させられている。1993年に上記のような事情でデミレルは大統領となったが、実権を掌握し続けるために、いわば、パピットとしてチルレルを首相にしたといわれる。しかし、正道党の幹部や党員たちに、政界入り後僅か二年のチルレルを首相として受け入れさせるのは極めて困難であったようで、デミレルは、チルレルを「わが娘」と呼んで、反対を押し切ったという。ただし、チルレルは首相就任後はデミレルの思い通りには動かなかったようで（むしろ自立的で権威主義的で、タカ派的であった）、デミレルは、後に、選択を誤った、と語ったという<sup>(2)</sup>。

チルレルは、北欧のブルントラントやハローネンのような性の平等の拡大の中で登場してきた政治家ではなかったし、確かに、首相となることによって女性の新しい役割モデルを示しはしたが、その在任中に性の平等を進めるといったことはなかったという<sup>(3)</sup>。

(1) トルコでは、1920年代に、一夫多妻制が廃止され、女性が相続権や離婚の権利を持つようになった。1930年代には、選挙権も認められた。しかし、現実には、政治の世界は男の世界であり、父や夫が、その娘や妻を政界に導き入れたのであり、男の後盾なしに、女性が政界入りすることはめったになかったという。Cf. Yesim Arat, *Patriarchal Paradox: Women Politicians in Turkey*, 1989. Yesim Arat は、トルコの男性優位の家父長制的関係は、マクロ的には女性の政治参加を妨げているが、ミクロ的に逆説的に容易にしている、と述べている。Cf. *Ibid.*, pp. 117-120. 同書に示されているデータによれば、女性の国会議員は、男性の国会議員以

## 「アジア的価値」とアジアの女性政治家の類型学

- 上にその家族（父，夫，兄弟）に国会議員をもち，政治的出来事や信条よりも，こうした家族の勧めで政治家となっているケースが多い（ただし必ずしも包括的なデータではない）。Cf. *Ibid.*, p. 84-85. 「女性の政治家は，政治が 家族の私事の一部になっているような家族から現われている。」
- (2) この辺りの事情については，アンカラ大学・準教授の Cagri ERHAN から教示をいただいた。Cagri ERHAN は，アジア太平洋研究センターのアジア的価値に関する研究プロジェクトのメンバーである。
- (3) Cf. Yasim Arat, *A Woman Prime Minister in Turkey: Did it matter? Women and Politics*, Vol. 19 (4) 1998. この小論でのチルレルについての記述は，この論文に多くを負っている。

### (2) アジア的類型Ⅱ 夫が著名な政治家で 夫の死後に政治家となったケース

#### 類型Ⅱ-1 夫の悲劇的な暗殺後に跡を継いだ政治家たち

- 1 スリランカの首相・S.R.D. バンダラナイケ Sirimavo Bandaranaike (1960-65) (1970-77) (1994-00)
- 2 スリランカの大統領・クマラトゥンガ Bandaranaike Kumaratunga (1994-)
- 3 フィリピンの大統領・アキノ Corazon Aquino (1986-92),
- 4 バングラデシュの首相・カレダ・ジア Khaleda Zia (1991-96), (2001-)

上記の四人について考察するのに先立って，「西欧」の場合を概観してみよう。「西欧」（この文脈では北米，オセアニアを含めて）の女性の大統領や首相の中で，ポルトガルの首相・ピントシルゴ Ruivo Pintasilgo（在任1979-1979），ポーランドの首相・スホッカ Hanna Suchocka（1992-1993），スイスの大統領・ドライフス Ruth Dreifuss（1999-99），これらの政治家は，独身であり，フィンランドの大統領・ハローネン（2000-）はいわゆるシングル・マザーである。アジアの女

性政治家に、独身者はいない。ブトーが、政治活動を本格化するにあたって、あえて、伝統的な見合い結婚で、政治的野心のない男と結婚したことは知られている。独身であること自体が、政治家として活動の妨げになるからである。他の女性大統領や首相たちは、それぞれ結婚しているが、夫が、高名な政治家であったケースはない。暗殺といったことはそもそも「西欧」では稀なのであるが、夫が暗殺に倒れた政治家であったというようなケースは無論ない。

1 S. R. D. バンダラナイケ (1916-2000, 以下単にバンダラナイケと記す) は、1959年9月に暗殺された首相ソロモン・バンダラナイケ (1899-1959) の夫人である。ソロモン・バンダラナイケは、王室に次ぐ最高の貴族の家系であり大農園主であるバンダラナイケ家の当主である。<sup>(1)</sup> バンダラナイケは、1959年にこの夫ソロモン・バンダラナイケが凶弾に倒れた後、政治の世界に入り自由党総裁となり、1960年7月の総選挙に勝利し首相となった。<sup>(2)</sup> 議院内閣制の下での世界で最初の女性の首相である。<sup>(3)</sup> ソロモン・バンダラナイケの暗殺は、スリランカの政治の最大のまた最も深刻な争点であるシンハラ人とタミル人との対立に絡んだものであった。

スリランカの政治は、自由党 S F L P と国民党 U N P の二大政党制であるが、前者はバンダラナイケ家の影響下にあり、後者は、父子二代の首相を出したセナナイケ家の影響下にあった。

バンダラナイケは、彼女自身、貴族の家系である大地主ラトワッタ家の出身である。24歳の時に17歳年長のソロモン・バンダラナイケと結婚している。バンダラナイケは、結婚後、各種の婦人団体の運動には参加していたという。

(1) 吉宗宏「スリランカにおけるソロモン・バンダラナイケの歴史的位  
置と役割」『東洋研究』第74号 1985年2月。

- (2) 『南アジアを知る事典』(平凡社) 578頁, 参照。この女性政治家のリサーチの, とりわけ最初の段階では, こうした事典類, また, 各種の, 政治家人名事典に助けられた。例えば, *International Who's Who*, *International Who's Who of Women* 等である。Sisira Edirippulige は「バンダラナイケは, 夫が暗殺されたとき, 主婦であり三人の子供の母であったが, 政治の嵐のなかに投げ込まれた」(バンダラナイケへの追悼文)と表現している。*Sunday Star Liner* (Auckland), Oct. 15 2000.
- (3) 吉宗宏「スリランカにおけるシリマボ・バンダラナイケの歴史的位置と役割」『東洋研究』。

ただし, 世界各国で国王に任命された首相のなかにバンダラナイケ以前に, 女性の首相がいなかったかどうかをまだ確かめていない。

2 チャンドリカ・バンダラナイケ・クマラトゥンガ(1945- , 以下クマラトゥンガと記す)は, ソロモン・バンダラナイケとバンダラナイケの子供(次女)である。他に長女スネトラと長男アヌラがいた。アヌラは, 夫の暗殺後クマラトゥンガがイギリスにいた時期, 母バンダラナイケの側近としての地位を占めていたが, いわば姉との競争に破れ, スリランカ自由党を離党している(長女については情報を得ていない)。

クマラトゥンガは, 大学卒業後, フランスに留学, 1970年代に母である首相の下で土地改革に取り組んでいる。しかし, クマラトゥンガを決定的に政治の世界に引き入れたのは, 夫の死であったと思われる。チャンドリカは, 1978年, 映画俳優でありまた政治家としても人気のあったビジャ・クマラトゥンガと結婚する。恋愛結婚である。ビジャ・クマラトゥンガは, タミルゲリラの根拠地であるジャフナに入り和平交渉にあたったが, シンハラ民族主義者によって1988年に暗殺される。この暗殺後の数年, クマラトゥンガは, イギリスへの逃避を余儀なくされたとい<sup>(1)</sup>う。帰国後, 母バンダラナイケの側近としての地位を占めていた長男アヌラを排除し, スリランカ自由党内での地位を確立した。1990年代, 州政治を経て国会議員となり, 大統領に当選する(スリランカの大統領は, 国民の直接選挙によって選出されて<sup>(2)(3)</sup>いる)。

- (1) この辺りの事情については Sisira Edrippulige にお聞きした。Sisira Edrippulige は、スリランカ出身で、2003年現在、神戸学院大学法学部のスタッフである。
- (2) クマラトゥンガの選挙ポスターには、二種類あり、一つは、母を横に父を背景に置いたもの、一つは亡き夫と父を背後に置いたものであるという。荒井悦代「チャンドリカ・バンダラナイケ・クマラトゥンガ」『アジア研ニュース』No 162 (1995.2)「特集・アジアの女性首相・大統領」
- ① 荒井は、こうした事情から「よくいわれる年齢的に適当な人物がいなかったから、娘あるいは妻が一族の遺産を継いだのだという解釈は成り立たない」としている。
- (3) バンダラナイケとクマラトゥンガについては、以下に、教えられるところが多かった。<http://www.asia2000.org.nz/educate/leaders/bgroud/index.shtml> <http://www.gluckman.com/ChandrikaKumaratunga.html>.  
<http://www.priu.gov.lk/execpres/cbk.html>.  
<http://news.bbc.co.uk.2/hi/southasia/566562.stm>.

この小論で取り上げた、フィリピンのアロヨなど他の政治家の多くについても、それぞれインターネットを参照させてもらったが、アドレスは逐一記載しないことにする。

3 コラソン・アキノ (1933- , 以下アキノと記す) は大統領候補であり1983年に暗殺された著名な政治家ベニグノ・アキノ (1932-1983) の夫人である。アキノは、大農園主 (政治家, 下院議員) の子供であり、アキノの祖父も母方の祖父も上院議員であった。アキノは、アメリカ留学後、ベニグノ・アキノと結婚する。その年、ベニグノ・アキノは市長となり、政治家としての輝かしい道を歩みだす。アキノは、その後、夫の暗殺に至るまで、少なくとも表立って政治活動はしていない。ただし、このことは、当時のメディアの多くが伝えたように、「普通の主婦」が独裁政治に抗して立ち上がったということでないであろう。アキノは、夫が暗殺されるまでに長く政治との関わりをもっていたからである。アキノは、政治的家系の出身であり、また政治的家系の出身者である政治家ベニグノ・アキノの夫人となり、とりわけ夫の入獄と亡命の時期に、現実政治との関わりをもってきた。

アキノは、夫の暗殺後大統領候補に押されることになり、1986年、選挙で当選し、マルコスが国外に逃亡し、大統領に就任する。

- (1) Jeanne-MARIE Col, *Managing Softly in Turbulent Times: Corason C. Aquino, President of the Philippines*, pp. 23-24, in Michael A. Genovese, *Women as National Leaders*. アキノについての記述はこの論文に多くを負っている。

アキノは、夫の選挙キャンペーンでも、止む終えず演説会場にいった場合でも夫と共に壇上にあがるようなことはなく、聴衆の一人として夫の演説を聞いていたという。ベニグノ・アキノが結婚に際してアキノに期待していた役割も主婦として母としての役割であったという。Cf. Isabelo. T. Crisostomo, *Cory: Profile of president*, 1986, p. 23. Isabelo. T. Crisostomo は、以下のように述べている。「こうして、死は、夫・ニーノを肉体的にはマルコスとの英雄的闘争のクライマックスから除外したが、コリーが、彼の名前の魔術的力、彼の神秘性とカリスマ、こうしたものを引き継いで、彼の跡を継いだ。コリーが、様々な反マルコス勢力を統一するのに成功したのは実際に彼女がニーノの化身であったからであった。……彼らは、コリーの旗の下に結集し、ニーノ、ニーノと同じ拍子と激しさで、彼女の名前、コリー、コリーを叫んだ。」 *Ibid.*, 140-41.

- (2) Linder Richter, *Exploring Theories of Female Leadership in South and Southeast Asia*, p. 531. *Pacific Affairs*, 63. 1990-91. Richter は、南アジアや東南アジアで多くの女性政治家が存在してきたことに関して、アジアの文化は女性の指導者を受け入れてきたが、性の不平等にもかかわらず見られる女性のリーダーシップの好機は、政治的自由主義の先駆けとはなっていない、と結論付けている。Cf. *Ibid.*, p. 540.

4 カレダ・ジア (1945-) は、1975年のクーデター後に軍の実権を掌握し大統領 (1977-81) となったが、1981年に暗殺されたジアウル・ラーマンの夫人である。ジアウル・ラーマンは、アワミ連盟に対抗する民族主義政党BNPを軍部の力を背景に育成した。ジアウル・ラーマンは、民政移管を行なったのであるが、軍の不満分子によって暗殺された。翌年、エルシャド陸軍参謀総長によるクーデターが起き、軍政に戻る。エルシャドは自分のコントロール下における政党 (Janodal) を育成し、

アワミ連盟も民族主義政党BNPもエルシャド政権によって切り崩されまた迫害を受ける。この時期に、アワミ連盟の党首となったのが前述のハシナであり、民族主義政党BNPの党首となったのがカレダ・ジアである。カレダ・ジアもハシナ同様に、夫の暗殺以前は政治との直接的な関わりを持たない人であった。カレダ・ジアは、1945年に生まれ、1960年に当時大佐であったジアウル・ラーマンと結婚している。夫の死後に、1982年にBNPに入党し1984年に党総裁となっている。カレダ・ジアは、権力を握った将軍の夫人ではあったが、夫の死後、軍と対立し民主化闘争を率いる政党の党首となったわけである。<sup>(1)</sup>

1990年、民主化闘争でエルシャド政権が崩壊し、1991年の総選挙で、BNPはアワミ連盟を押さえて第一党になり、カレダ・ジアが首相となる。<sup>(2)</sup>

- (1) この時期の弾圧については、Cf. Sirajiddin Ahmed, *op. cit.* Chapter 8. この著作は、無論前述のようにハシナへの弾圧に就いて記しているのだが、ジアへの言及も見られる。
- (2) 村山真弓「政治を司る二人の女性」『アジ研ニュース』No 162 (1995. 2)「特集・アジアの女性首相・大統領」③ 村山は、「さながらハシナとカレダは、ムジブ、ジアという神格化された二人の偶像を祭る巫女であり、党内では誰もそれを否定できないところに彼女たちの強さがある。」と述べている。

アジア的類型Ⅱ-2 夫の死後数十年を経てその地位に就いたケース

こうしたケースは大統領あるいは首相になったケースとしては見られないが、それに相当する役職の代理に就任したケースでは見られる。

1 中国の国家首席代理(1967-75)となった宋慶齡(1892-1981)は、中国革命の指導者孫文(1866-1925)の夫人である。ただし、宋慶齡の就任時にはもう一人の国家首席代理・董必武(男性)がおり実権は彼女にあったといわれる。彼女が国家首席代理となったのは、孫文没後40年余を経てである。

## 「アジア的価値」とアジアの女性政治家の類型学

2 モンゴルには元首である幹部会議長（適当な訳語ではないかもしれないが）の代理（1953-54）を務めたヤンジマー（Yanjmaa, 1893- ?）既に故人であろうと思うが確認できていない）はモンゴル革命（1921）の最高軍事指導者スヘバートル（Sukhe-Bator）の夫人である。スヘバートルは、旧モンゴルの公式歴史上、最高の革命指導者であるが、革命後間もなく亡くなっている。ヤンジマーは1910年にスヘバートルと結婚し、1921年、モンゴル人民革命党入党、ロシア留学している。夫の死後、元首（代理）に就任する以前に政府要職に就いている。<sup>(1)</sup>

宋慶齡とヤンジマーのケースは、夫の悲劇的な死をきっかけに政治家となるケースとは異なるケースがあることを示している。二人の夫は、それぞれにいわば、「建国の父」であるが、夫の死後、数十年を経て、その地位に就いており、アジア的類型Ⅱ-1のケースとは異なるように思われるからである。

(1) スヘバートルについては、チョイバルサン他著・田中克彦編訳、『モンゴル革命史』の中の、D. ダシジャムとL. バト=オチルによる「スヘバートルの生涯」がある。同書の3分の2を占める「詳伝」である。この「詳伝」の中にヤンジマーについての記述が断片的にはあるが出てくる。

(補注) モンゴルには、ヤンジマーの他に、トヤ Nym-osoriin Tuya が首相代理（1998-98）となっている。トヤは、共産党政権時代の保健大臣の娘であるが、トヤの父が、何年に死んだのか、どのようにトヤの首相（代理）就任にかかわったのか確認できていない。

ヤンジマーとトヤについて有益な情報を、モンゴル工科大学準教授 Nyanmaa Galimaa から頂いた。Nyanmaa Galimaa は、アジア太平洋研究センターのアジア的価値に関する研究プロジェクトのメンバーである。

### （付1） アジアに見られる「西欧」的類型

1 イスラエルの首相・ゴルダ・メイア Golda Meir（在任1969-74）

1 ゴルダ・メイア（1898-1978、旧姓マボヴィッチ）は、ウクライ

ナノのキエフに生まれたが、彼女が八歳のとき、マボヴィッチ家の人々（ユダヤ人である）は、アメリカに移住している。父は大工として働き母は雑貨屋を営んだ。ゴルダ・メリアは、子供の頃から姉の影響で政治への関心が高かったという。ゴルダ・メリアは、姉の影響で、シオニズム運動に参加するようになる。父親は、娘たちが高等教育を受けることにも、シオニズムに関心を持つことにも賛成ではなかったようで、早く結婚して家庭に入ることを望んでいたようである。

ゴルダ・メリアは、高校卒業後、1917年に Morris Myerson と結婚している。夫は芸術に関心を持ち政治には興味をもたなかったという。第一次大戦後、二人は、1921年にパレスチナに移住する。ゴルダ・メリアにとって、第一次大戦後の状況はシオニズムを実現する好機のように思われたからである。<sup>(1)</sup>

ゴルダ・メリアは、移住してくる若い女性たちに仕事の訓練をする仕事に就く。夫は、彼女が仕事に就くことに賛成ではなかったようで、彼女は子供を連れて夫と別居することになる。<sup>(2)</sup>

イスラエル「建国」戦争勃発後、ゴルダ・メリアは、アメリカでの資金獲得のためのキャンペーン活動など外交関係で活躍する。夫は、この頃、1951年に死去している。ゴルダ・メリアは、やがて外務大臣を務める。1970年に労働党党首で首相であった Levi Eshkol が心臓発作で倒れ、ゴルダ・メリアが、首相となる。この時点では、選挙管理内閣の色彩があったようであるが、翌年の総選挙に労働党が勝ち、ゴルダ・メリアは首相として四年間政権を担当する。

ゴルダ・メリアは、有力政治家の娘でも夫人でもなく、むしろ貧しい家のお出であり夫も無名の人であり、他のアジアの女性政治家のような家族的背景を持たない。ゴルダ・メリアは、むしろ父や夫の意志に反してシオニズムの大儀のために政治家への道を進んだように思われる。

しかし、イスラエルは地理的にはアジアに位置するが、人口の多くがアジア以外からの移民であることなど、他のアジア諸国とは政治文化が

## 「アジア的価値」とアジアの女性政治家の類型学

異なるように思われる。地理的なアジアが、アジアとして共通性をもつ必然性はないように思われる。ゴルダ・メイアは、明らかに「西欧」的な女性政治家である。

- (1) Golda Meir, *My Life*, 1975, chapter3 I choose Plestine. パレスチナへの移住は、ゴルダ・メイアの政治活動の出発点であったわけである。両親は、第一次大戦中のシオニズム一般には強い関心と賛意を持っていたが、Cf. *Ibid.*, p. 54. 娘のパレスチナ行きには賛成でもなかったようで、夫もまた熱心であったわけではないようである。Cf. *Ibid.*, p. 59. 「モリスは私のようにシオニズムに確信を持っていなかった」『私は、あなたが熱心なナショナリストであることを喜ばばいいのか悲しめばいいのかわからない』(1915年のモリスからゴルダ・メイア宛の手紙)。移住時の両親の複雑な心境については、*Ibid.*, pp. 69-70. 出発点においてもその途中においても、両親あるいは夫の影響やパトロニッジは見られない。
- (2) Seth Thompson, *Golda Meir: A Very Public Life*, p. 141. In Michael A. Genovese, *op. cit.*. この小論でのゴルダ・メイアについての記述は、この論文に多くを負っている。

### (付2) 中南米に見られるアジア的類型

1 ニカラグアの大統領(1990-97)となったチャモロ (Violeta Barrios de Chamorro) は、1929年に富裕な家に生まれている。チャモロの父は、彼女が19歳の時に死去している。チャモロは、アメリカ留学後、暗殺された著名な反政府運動の指導者でありかつニカラグア屈指の有力家系チャモロ家の一員ペドロ・ホアキン・チャモロと結婚する。ペドロ・ホアキン・チャモロは、保守党のリーダーで新聞編集長であり、ソモサ一族と対立し、しばしば投獄と亡命を経験しているが、チャモロ自身には、これといった政治活動歴はない。<sup>(1)</sup>

1978年の夫の暗殺後、反政府運動によるソモサ政府の崩壊により国家元首(むしろ五人評議会の一員というべきかもしれない)となっている(1979-80)。その後、政界の外にいたが、1990年の大統領選挙で反サディニスタ諸政党のいわば象徴として統一候補に担がれて当選する。<sup>(2)(3)</sup>

2 アルゼンチンのイザベル・ペロン（以下イザベルと記す）は、大統領ペロンの夫人であるが、ペロンとともに副大統領に当選（アメリカ同様、正副大統領をセットで選出する）した。その九ヵ月後にペロンの死去によって大統領に昇格（1974）したわけである。しかし、18ヵ月後にイザベルの政権はクーデターで覆される。五年の自宅軟禁の後、イザベルは、スペインに出国したが、1985年まで名目的にはペロニスタ党の党首であった。イザベルは、ペロンが亡命の地マドリッドで再婚した女性である（最初の夫人がエバ・ペロンである<sup>(4)</sup>）。イザベルは1931年にアルゼンチンで生まれ、イザベルの父は彼女が幼い時に死去している。1956年、ダンスーをしていたイザベルはペロンと知合い、1956年に結婚している。イザベルには、政治的熟練や野心はなかったようである<sup>(5)</sup>。

チャモロもイザベルも、アジア的類型Ⅱに属する政治家といえよう。このことは、アジア的類型そのものが、単にヨーロッパ的でないことを示すものであり、むしろ非ヨーロッパ的類型というべきものであることを示しているように思われる。夫の悲劇的な死でその跡を継ぐ政治家というパターンは、アジアに固有のものではないからである。

- (1) チャモロ自身、「わたしの仕事は、彼の妻であることであり、子供たちの世話をし、家を切り回し、彼の旅行に同行し、獄中にあるときは食物を持っていく、そうしたことでした……」というように述べていたという。M.A. Uhlig, *Opposing Ortega*, *New York Times Magazine*, 1990 February 11. p. 62. Cf. Michelle A. Saint-Germain, *Women in Power in Nicaragua: Myth and Reality*, p. 79. In Michael A. Genovese, *op. cit.*
- (2) サディニスタ戦線の戦闘員の3分の1は女性であったといわれ1980-90年の間、サディニスタ政権は、性の平等を進めたといわれ、その点でサディニスタ政権は、チャモロの当選の道筋を作ったわけであるが、チャモロは、非サディニスタ戦線の統一候補であったわけである。チャモロは、その統治能力故というより勝てる候補として選ばれたという。
- (3) 「チャモロは、血に染まったニカラグアの政治史の中でなされてきた犠牲の象徴であった。」Ibid., p. 84 チャモロ自身は、大統領候補に指名されたことを、自宅にいてラジオで知ったという。Cf. M. A. Uhlig, *op.*

## 「アジア的価値」とアジアの女性政治家の類型学

cit., p. 62.

(4) エバ・ペロンは、ペロンと共に副大統領として選挙に出馬する意志をもちペロニスタ党も大衆もそれを望んでいたが、ペロンの反対で出馬を取り止めたといわれる。エバ・ペロンは、その自伝で、「私の、私のもつもの、私の考えること、私の感じるもの、全てが彼のものです……私が高く翔べるとしたら、彼ゆえです……」と述べている。Eva Peron, *My Mission in Life*, 1953. Quoted in Marysa Navarro, The Case of Eva Peron, *Journal of Women in Culture and Society*, 3. 1977, pp. 239-40. ナヴァロは、「彼女(エバ・ペロン)の権力と指導性は、彼(ペロン)に依存していた」と述べている(括弧内は引用者)。Ibid., p. 240.

(5) Cf. Sara J. Weir, Peronisma: Isabel Peron and the Politics of Argentina. In Michael A. Genovese, *op. cit.*。ただし、大統領選挙時に既にペロンの健康は勝れず、その死去によって副大統領が昇格する可能性が話題に上っていたようである。Cf. Ibid., p. 166.

(補注1) ボリビアのテハダ(Lidia Gueiler Tejada, 1925年生)は、1979年にブッシュ大佐がクーデターで大統領に就任したが軍部内の反対もあり辞任、議会で臨時大統領に選出されている。テハダの在任は八ヵ月(1979-80)である。テハダは、1946年に「国民革命運動」に加わり1952年革命に参加、1956年に国会議員、1964年のクーデター後、亡命、その間にチリの大統領となるアジエンデと知合う。1979年政界復帰。1980年、Luis Garcia Meza Tejada 将軍のクーデターにより、再び亡命、1982年に帰国、コロンビア大使などになっている。Luis Garcia Meza Tejada 将軍(1932年生)はテハダの従兄である。テハダの家族的背景については情報を入手できていない(未婚か既婚か未確認)。

(補注2) 女性の国会議員の割合

IPU (International Parliamentary Union) の調査データによれば、2002年12月現在の女性国会議員の地域別の割合は以下のようなものである(ただし、どの国から回答を得ているのかについてはホームページ上に記載がない)。

総国会議員数	41,746人		
女性国会議員数	5,673人	(15.0%)	
北欧	39.7%	アジア	15.2%
ヨーロッパ(北欧を除く)	15.5%	アラブ	5.7%
アメリカ大陸	16.5%	アフリカ(サハラ以南)	13.6%

お わ り に

アジアの女性の大統領あるいは首相は、イスラエルのゴルダ・メイアを例外として、全員、家族のなかに著名な政治家がいたわけであり、具体的には、父あるいは夫が著名な政治家であったわけである（ただし、スリランカのクマラトゥンガの場合は母もそうであった）。これは、「西欧」の女性の大統領あるいは首相と明瞭な対照をなしている。このことが何を意味しているか、結論付けるには、まだなお多くの作業が要るが、この小論での考察から、以下のようなことが、仮説的に言えるものと思う。

家族の中で、父あるいは夫の死後、娘あるいは妻が、家族の一員としてのいわば義務的なものとして、その跡を継ぐことが、求められている、あるいは、認められていると思われる（この小論では考察しなかったが、息子が引き継ぐのはより自然なこととされているであろう）。このことは、したがって、単に、家族の私的な事業についてのみではなく、公的な政治的活動（役職）についてもそうではないかと思われる。また、このことは、単に家族の中で、そのように思われているということではなく、社会が、というか、その社会つまりアジアのそれぞれの国の人々が一般に、そう意識しているのではないかと思われる。

父あるいは夫が死によって成し遂げられなかった仕事というか事業は、家族のメンバーには家族の仕事（事業）として意識されているように思われる。また社会が、それぞれのアジアの社会が、というか、その社会の人々が一般に、そう意識しているのではないかと思われる。

家族は、単に私生活での単位であり、また私的ビジネスの単位であるのにとどまらず、公的な政治の単位にもなっている。単に事実としてそうになっているのではなく、いわば、社会的に公認された単位であるように思われる。ある個人（故人）への敬意というか支持は、その家族の他の成員にも及ぶ。この点から見ると、私的なものと公的なものを分か

「アジア的価値」とアジアの女性政治家の類型学

つ境界線は、不分明である。

これらのことは、「西欧」における、家族の在り方あるいは政治と家族の関わりとかなり明瞭に異なっているように思われる。

ただし、これを、ヨーロッパとアジアの、地理上の区分としての、違いというようにとらえられるかどうかは、問題であろう。イスラエルも地理上はアジアに属するし、中南米にも「アジア」的なケースがみられるからである。

以上